感覚する身体

井　上　龍　介
東亜大学　総合人間・文化学部　人間学研究室
E-mail:inoue@toua-u.ac.jp

1. はじめに

17世紀ヨーロッパの思想家たちは、それまでの宗教的束縛から徐々に解放され、新時代到来の息吹を感じつつ、宇宙や人間身体や人間精神について、また社会構造や政治体制について、科学的視点から観察を行い、仮説を立てるようになった。そうした先駆的業績をあげた人物として、私たちはトマス・ホッブズ、ピエール・ガッサンディ、ルネ・デカルトといったひとびとを名指すことができるし、ことに身体論の分野では、デカルトの『人間論』『情念論』などのテキストがまず念頭に浮かぶ。本稿では、ホッブズをはじめ、スピノザ、ライプニッツおよびマルブランシュの感覚論や表象論に依拠しつつ、外界の実在性、観念の本性、知覚の妥当性に関する認識論的評価などの論点について、それぞれの思想家の見解を瞥見し、この時代の身体-感覚論の類型化をまず試みる。こうした素描の作業の遂行に当たって、身体および感覚にまつわる私たちの常識的意見をいったん括弧に入れ、いわゆる古典主義時代の身体-感覚論の理論的射程とアクチュアリティについていささか議論したい。

2. 心象としての感覚

自分が身体をもっていることを私たちが疑うことは、まずない。椅子に座り、呼吸し、周囲の事物を見回し、ペンを握るのは私である、言い換えれば、私の身体である。暑いと感じ、寒いと感じるのは私である、つまり私の身体である……という具合。だが哲学者という奇妙な人種は、自分が身体をもつ存在である、ということをいったん括弧に入れて保留することに、抵抗を感じない。《自分》というものが身体あるいは身体の一部分を指示しているのか、それとも身体ではない何かを指示しているのか、についても、差し当たり判断を控えておく。「そういうお前が、ここの部屋のその椅子に掛けて、頭を掻き掻きなにか書いているのを俺は今見ているぞ」という外野からのありがたいご意見も、括弧に入れる。こうしてすべてをペンディング状態に維持する。すると、赤や青や外光がある。暖かさや冷たさ、また滑らかさがある。人の声、風の音が聞こえる。これらの事実がただたんに事実としてある。そういう事実についての意識がある。しかも驚くべきことに、この事実あるいは意識は、無限に精緻な細部から成っていて、絶えず移ろい、絶えず変化する。これは総体として否定しがたく圧倒的な事実であるので、《これは夢かもしれない》と疑ったデカルトにせよライプニッツにせよ、章節が改まるやいなや、自然的事物の物理的諸性質について考察を始めたほどである。だからホッブズが、

「感覚の原因は、外的物体すなわち対象であって、それは、それぞれの感覚に固有の器官

東亜大学　総合人間・文化学部『総合人間科学』第5巻，2005年3月，pp. 3-9

を、味覚・触覚のばあいのように直接に、あるいは視覚・聴覚・嗅覚のばあいのように間接に圧迫する」[1]。

と書いているのを読むと、私たちは安心して、やはり常識が大事だ、などと思うのである。私の身体はまちがいなくここにあり、身体の周囲には無数の物体があり、それらからの直接間接の作用の結果として、私あるいは私の身体は色彩、形、音、寒暖、味などを知覚する。たとえば《救急車がサイレンを鳴らしている》《運動場は黄土色をしている》《このチョコレートは甘い》などの判断は疑いようのない事実を表明しているのであって、世界はこのとおりのあり方をしている。ところがホッブズは続けてこう書いたのである。

「すべて感覚しうるとよばれる性質は、それを生じさせる対象の中にあるのだが、物質のそれだけさまざまな運動にほかならず、それらの運動によって、対象がわれわれの諸器官をさまざまに圧迫する。……（中略）……ところが、われわれは、見えるものがある場所と、それが現象する場所とが別であることを知っている。そして、ある一定の距離をおくと、実際の対象そのものが、それがわれわれのうちに生じさせる心象を、所有しているように見えるが、しかも対象と表象像 image ないし心象 fancy とは別のものである。このようにして、感覚はすべてのばあいにおいて、根源的な心象にほかならず、この心象は……（中略）……われわれの耳や眼やそれに定められた諸器官に、外的事物が圧迫すなわち運動を与えることによって、生じる」[2]。

対象そのものと対象の意識とは区別されなければならない。対象が感覚される諸性質を所有しているという先入観念は排除されなければならない。結局、ホッブズによれば感覚は「見かけ（seeming）」あるいは「心象」でしかない。世界の真のあり方とは、際限なく充満する物質と、その無限に多様な運動にほかならない。救急車のサイレンはけっして鳴らず、運動場は黄土色でも何色でもなく、チョコレートに味はない。そして《私》という意識も、この意識に生じる《身体》という固有の事実も、煎じ詰めればよく組織された物質の塊とこの物質塊内部に生じつつある無数の運動に還元されてしまう。

3. 身体が感覚する

すると、最初のペンディングの件はどうなったのか。ホッブズは、物質とその運動だけは確かに実在であると請合っている。そしてもろもろの感覚はすべて内的心象であって、究極すれば身体というよく組織された物質塊に生じる多様な物質運動そのものである。彼はまた「すべての思考の根源は、われわれが感覚 SENSE とよぶものである」[3] というのだから、一切の思考、一切の心理現象もまた、脳や神経に生じる複雑精妙な物質運動の所産である。したがって、「見かけ」あるいは「表象像」の集合としての世界――常識人たる私たちがふつうに世界とよぶもの――と、真実の世界つまり感覚的諸性質を欠いた物質で充満した宇宙、とがあるわけである。ホッブズはアトミストではないけれど、これはレウキッポス、デモクリトス、エピクロスなどの古代のアトミストたちが唱えた宇宙の真相に近い。そしてこの宇宙の真相は、あきらかに、私たちに馴染み深い世界とはまったく異質である。さきほどの括弧をはずしてしまえば、私が《身体》をもつのではない。身体が《私》をもつのである。《私》が感覚するのではない。《身体》が感覚するのである。これとよく似たやり方でペンディングを解除するのはスピノザである。スピノザによれば[4]、人体はきわめて複雑な組織の、きわめて多数の個体から合成されている。この身体を外部の物体が機械的に刺激すると、身体はその物体の本性と身体自身の本性とを共に反映した変化をこうむり、この変化は「表象像（imago）」として知覚される。「表象する（imaginari）」という観念的作用面から身体を解釈すれば、それは「精神」とよばれる。したがって人間精神は、身体

のものでもあれば外界のものでもある物理的特性を、光、色彩、音、臭いなどとして表象するわけである。しかしこの表象作用は、その同じ瞬間に身体に生じつつある変様そのものでもあるので、もろもろの感覚をスピノザの《神》という一枚の鏡に映し出せば、鏡の向こう側には純然たる物質運動の世界がある。

4. モナドは身体をもつ

ところで、無限に精緻な細部からなる色、音、臭い、寒暖などの膨大な事実関係を認めておいて、他方で物質的存在を真実在としては否定する、という大胆な道もある。つまり、身体およびその周囲（外界）が物体として存在し、外界から身体への物理作用の結果として感覚が生じる、という因果関係そのものを否定する路線がある。スピノザの同時代人ライプニッツは、この路線を採用した哲学者である。彼は真実在としてはモナド（単子）しか認めない[5]。モナドは活動体あるいは生命単位であって、無数に存在し、この世界を構成すると同時に、それぞれのモナドが小さな世界でもある。モナドは絶対的な意味で一（イチ）なる存在であるが、同時に無限の多様を映し出し表出する心的活動体でもある。すべてのモナドが互いを映しあい、互いに映しあうことによって全体的な調和ないし和合を形成する。まことにもって難解な話であるが、要は、これらのモナドが世界全体を物質的世界として表現するという点にある。モナドは、各自が自分を物質的生命として表現するので、すべてのモナドは身体をもつ。ホッブズが感覚を「心象」とよび、スピノザが可視的事物を「表象像」とよんだのと同じ線上で、ライプニッツは身体を「現象」とよぶことができた。ただし、心象が物体から生じ、表象像が物体の変様と対を成していたのとは異なり、現象はいわば物体に貼りついている。物体から現象という覆いを引き剥がしえないようにして貼りついている。もろもろの物体ないし身体は、「しっかりした現象」として無限に精緻な世界の一部分を形成する。

5. 私たちは観念を味わう

心象にせよ表象像にせよ現象にせよ、いずれも対象の側ではなく主体の側に位置づけられる。それならばなぜ、私たちは色や音や臭いを自分自身に属するものとしてではなく、外界に属する性質として意識するのであろうか。なぜ私たちは、それらが自分の感覚にすぎない、という自覚をもたないのであろうか。この点について、ホッブズはこう説明している。外的物体が私たちの身体諸器官を圧迫すると、

「この圧力は、神経やその他の筋や身体の薄膜の媒介によって、内部に伝わって頭脳と心臓に至り、そこに抵抗、反対圧力、すなわち、みずからを解放しようとする心の努力を、生じさせる。この努力は、外部へ向かっているので、なにか外部的な物質のように見える。そしてこの見かけすなわち心象が、いわゆる感覚なのである」[6]。

要するに感覚は、外界からの物理的作用に対する人体の反動、あるいは、外部に向かう心的努力であるから、いわば外界に向かって投射され、外界に属する事象として意識されることになる。《このアイロンは熱い》《このチョコレートは甘い》などというように。しかもそれは、感覚器官、筋、薄膜、心臓、脳髄などの身体組織を介して起こるきわめて自然的で必然的な運動であるから、私たちはいつでもそのプロセスは自覚せず、その結果だけを色彩、音声、臭いなどとして外界に関連づける。他方、ライプニッツのばあい、感覚は物体に引き離しがたく貼りついているので、言い換えれば、すべて感覚は物体的表象であり、自動的に外界の表現でもあるので、私たちは諸物体が固有の形、色彩、堅固さ、温度などを所有することをけっして疑わない。ライプニッツは、ホッブズと違って、モナドという心的実体のみを認めて物質的存在をたんなる現象に格下げしたが、感覚を、主体から外界への投射と見做す点で、両者は一

致している。だが他方で、感覚はそれ自体として物質的世界とはなんらの関連もない、と主張する論者もいる。たとえばマルブランシュにとって、感覚は飽くまでも私たちの内的世界の構成要素にすぎない。私たちが自分の部屋を眺め回すとき、私たちが実際に見るものは物質的実在としての外界ではない。

「厳密に言えば、君の部屋は可視的ではない。私が部屋を眺めるとき、私が見るものは本来的には君の部屋ではない。というのは、神がこの部屋を壊滅させたとしても、私は、今見ているすべてのものをきっと見ることができようから」(7)。

マルブランシュによれば、私たちの意識する世界と、純然たる物質界とは、完全に別の世界であって、両者の間に直接の交渉はまったくない。私たちが周囲の風景を見渡すとき、私たちはけっして本来の外界を見てはいないのである。むしろ私たちは内的世界の住人であり、内的世界とは「被造物の内奥の場所」、すなわち、神の「普遍理性」にほかならない。なにか狐につままれたような話であるが、論理的にはきわめて首尾一貫した見解である。映画『マトリックス』で描写された状況に近い、といえば、少しはわかってもらえるだろうか。『マトリックス』における電脳の役目を果たすのが、普遍理性である。映画では、ひとびとは電脳が創造した世界、すなわち普遍的プログラムのなかの個別プログラムであり、見るもの聴くもの食べるもの、すべてがプログラムであるのだが、マルブランシュの世界の住人は、普遍理性のなかに住む被造的精神であって、観念を見、観念を聞き、観念を味わう。そしてすべての観念はこの普遍理性に由来するのである。しかも、物質的世界なるものが真に実在しているか、それともたんなる幻想にすぎないかは、文字通り《神のみぞ知る》、つまり、私たちが物質自体の存在を論証することは不可能である(8)。マルブランシュ説の感化を受けたバークリーやアーサー・コリアは、積極的に物質界ないし外界の実在を否定するに至った。彼らはよりいっそうの論理的整合性を求めたのである。

6. 観念的身体は仮想空間のなかを歩む

私たちは物質的身体について議論してきたつもりでいたが、いまや観念的身体なるものが登場している。無数の個別観念から合成された生きた身体が現前している。身体を構成するすべての感覚的個別要素は、ひとつの例外もなく精神的変様であり、心的様態である。言い換えれば、それと同数の可感的観念である。それは身体周囲の諸事物についても同様であって、それら無数の観念が整然とした幾何学的法則性をもって配置されている。私たちはそこに世界の自然なあり方、あるいは信頼できる現実性を見出す。では、この一様斉一な純観念論的環境に、物質的多様性はいかにして導入されうるのであろうか。なぜ、私たちは、しかじかの対象について語りうるのであろうか。この世界の場所占有的拡がりと場所占有的多様性とは、いかにして実現されるのであろうか。というのも、幾何学的観念をはじめ、すべての観念自体は、けっして場所を占有しないからである。そこでマルブランシュは、諸観念の場所占有的配分を可能にする原理として、色彩——といっても、黒白明暗を含むきわめて広義の色彩——の感覚を提起する。色彩感覚は一様平坦な幾何学空間に場所的差異をもたらす。あたかも水墨画において、純白の和紙に墨汁の最初のひと刷けが振り下ろされるや、たちまち深山幽谷が、一筋の瀑布が、のどかな田園風景が、如実に現出するような具合である。一様平坦な幾何学空間（これは理念的空間であって、場所占有的拡がりではない）を、「英知的延長」とよぶマルブランシュは、次のように指摘する。

「私たちの見る諸対象の差異について私たちが判断を下すのは、もっぱら色彩の相違によるゆえに、英知的延長は色彩によってのみ、可視的となりしかじかの物体を個別に表現する……（中略）……色彩の諸感覚は本質的に差異があ

るので、私たちは物体の多様性について色彩感覚によって判断を下す」(9)。

マルブランシュにとっては、色彩の拡がりも熱の拡がりも痛みの拡がりも、もとをただせばすべて同一の観念、つまり英知的延長にほかならない。本来、形も色も硬さもなく、場所を占有することもない理念的幾何学空間が、色彩を介して可視化され、多様化され、場所占有的に表象される、というのが彼の言い分である。さらに、私たちに色彩や痛みなどの感覚が生じるとき、どこかに実在するはずの私たちの身体（物自体としての身体）には、それらの感覚の原因と見做されうる物理的変化が生じたはずである――「心身結合の一般法則」がそのことを保証する――から、感覚を身体と結びつけて、身体-感覚として理解することに支障はない。そうすると、あらゆる身体-感覚の根底には純粋に数量的な原理が存在し、私たちは自分の身体-感覚の背景に幾何学的かつ代数学的な整然とした秩序を見出すことになる。私たちの仮想的身体ないし観念的身体――その彼岸に物自体としての身体がある――は、このようにしてマルブランシュの理念空間のなかに定位され、無数の感覚が織り成す場所占有的拡がりのなかを歩むのである。そしてこの拡がりは、厳密に言えば、物自体の世界ではなく、一種の仮想空間にほかならない。

7. 《感覚する身体》とはなにか

以上のように、マルブランシュという哲学者は、私たちに馴染み深いこの世界を非物質的な精神世界に変貌させてしまう。私たちは観念でできた身体をもち、観念に触れ、観念を食い、観念を飲み、観念に衝突する。しかし、だからといってこれら無数の観念が私たちの自由になるわけではない。「延長を感覚することは私たちの意のままにならない」(10) からである。さて、本稿の最初のペンディングに戻ろう。私たちは、感覚しつつある事実をたんに事実として受容し、一切の断定や解釈は括弧に入れて判断を保留した。そこには、無限に精緻な細部からなる、絶えず移ろい行く色、音、臭い、形、寒暖などがあった。少なくともそういう意識はあった。このあまりにも豊饒な意識が、私たちの自己に発する完全に自発的かつ自動的な活動にほかならない、として括弧をはずせば、私たちは全宇宙に匹敵する私たちの《自己》という実体を立てることになり、ライプニッツ哲学の仮説によく似た仮説を採用することになる。そしてここに留まれば、私たちは独我論者になりかねない。つまり、全宇宙は《私》という一個の精神的実体が表象する仮想現実であって、真に実在するものはこの《私》ひとりである。私の周囲の物も人も、一切合財《私》によって形成された心象にすぎない、という病的な思想を承認することになりかねない。実際、ライプニッツは独我論の理論的可能性を示唆している。

「この生の全体が一場の夢にすぎず、可視的世界は幻影にすぎぬと言われようとも、この夢にせよ幻影にせよ、私たちが理性を正しく用いるとき、それらによってけっして欺かれないのであれば、私としては、それらが十分に実在的だと言うだろう」(11)。

つまり、この現象世界が若干の自然法則によって合理的に、かつ矛盾なく説明されさえすれば、たとえ独我論を受け容れたとしても、現象世界は十分に現実的であり、信頼するに足る実在性を有する。他方で、独我論を回避しようとすれば、私たちは予定調和説の信奉者になるしかあるまい。

次に、あの豊饒な意識を物質運動に還元してしまえば、私たちは物質的実体を立てることになり、エピクロスやホッブズの仮説によく似た仮説を採用することになる。そしてここに留まれば、私たちは、たとえば日常的な会話をはじめとする言語活動をいかにして物質運動から演繹するか、おおいに難渋するだろう。物質運動という機械論的次元から、高度の意識的精神活動を直線的に演繹することは不可能であろう。

物質運動を、神経細胞の多重連鎖的な興奮や、大脳の局所機能的理解に置き換えても、それほど見通しがよくなったとも思えない。物質から心に登り詰める途は、いまだかつて踏破されてはいないのである。もちろん、《百科全書派》として有名なドニ・ディドロのように、この途をあえて踏破しようとしたひともいるけれど、その試みは結局のところ想像と推測の積み重ねにすぎなかった。そうかといって、安易に《心》や《魂》や《精神》などという非物質的原理を最初に立ててしまえば、論理的整合性が失われかねない。

さらに、あの豊饒なる意識を唯一無限にして永遠なる神的実体の属性に還元してしまえば、私たちは汎神論的スピノザ主義を採用することになるが、私たちは、唯一無限の実体をたんなる仮説としてであれ認めることができるだろうか。同様の理由で、マルブランシュ説を採用することもきわめて難しい。すると大向こうから「お前さん、なにをごちゃごちゃ悩んでいるのかね。《花は紅。柳は緑。》そのまま受け容れれば済むことだ」という、ありがたいご託宣が聞こえてきそうである。自分も自分の身体も周囲の世界もすべて括弧にいれたまま生きてゆけばよいのである。だがそれには、懐疑主義の袋小路に入り込む覚悟が要る。無我無想の境地で一切煩悩を滅却できない私たち、事象を透徹する心眼をもちえない私たちとしては、それはいかにも息苦しい。どうにも落ち着かない。やはり誰しも落ち着き場所は欲しいのである。かといって、《物も人も見えるとおりにあります》流の素朴実在論に落ち着くのはつまらない。それくらいなら、初めからこんな苦労はしなかったはずである。それとも、《正反合》の俗流ヘーゲル主義的円環を見事にまわって、このたびめでたく最初の、しかしいっそう高次の出発地点に戻った、ということで手を打つか。それもなんだか誤魔化されたようで納得できない。だから私たちは相変わらず愚直にこう問い続けることにしよう。そもそも《感覚する身体》とはなにか。身体はなにを感覚するか、と。

8. 結び

身体が感覚する、というとき、そこには既にひとつの思い込み、ないし前提が潜んでいる。それは、ホッブズやスピノザの時代よりは遥かに洗練され精緻になってはいるが、やはり本質的には物質主義的な仮説のことである。視聴覚などの主だった感覚機能や、認識、感情、随意運動、言語機能などが大脳皮質の一定の区画に割り振られる。経験的に、それらの機能が大脳皮質上に局在化していることが知られる。また、情動のなかでも、いっそう古い由来をもつ攻撃や恐怖などの本能的機制、身体的自律機能、さらに感覚のなかでももっとも原始的な嗅覚は、いずれも大脳辺縁系に局在化している。また、現代の神経生理学的諸研究は、脳神経系の微細構造や情報伝達の仕組みに関するさまざまな新知見をもたらしつつある。脳髄という身体器官の重要性は、物心二元論を採用したデカルトがその中心部（松果腺）に精神の座を認めたことからも明らかなように、17 世紀の哲学者たちも十二分に承知していた。たとえばマルブランシュは、脳に生じる物質的変化（脳繊維の揺動）を契機として心身結合の一般法則が発動し、その物質的変化に対応する意識現象の発生をみるのだと指摘している[12]。

300 年あまり前の思想家たちは、今日から見てそれほど不条理な身体観をもっていたわけではない。マルブランシュやライプニッツは、生命体の構成単位である細胞、また微生物に関する、当時最新の知見でもって理論武装していた。むしろ本稿で名指されたすべての哲学者が、身体活動の諸機制に関して、厳格で首尾一貫した機械論的見解を採用していた。諸感覚が、身体という非常に精密に組織された物質塊から生じる、もしくは、この物質塊の変化を契機として生じる、あるいは、この物質塊の変化に同時的に対応している、と想定する点で、いずれの思想家も、世界の中心に《感覚する身体》を置き入れたのである。身体を介して、つまり心身結合の一般法則を介して、私たちは周

囲の事物と交渉し、周囲のひとびとと交流し、社会を成立させ、道徳を醸成し、信仰心を抱く、そうマルブランシュは指摘している[13]。またライプニッツにあっては、身体こそが《私》と《世界》とを結合する感受装置であり、運動装置であった[14]。

近い将来、本格的な自立的人工知能（A.I.）の時代が到来するだろう。やがて、肉の身体ではなく、金属や合成樹脂の身体をもった知性たちが、大学や企業の研究室から解放されて街を自由に闊歩するようになるかもしれない。そのとき、人間が創造した彼ら知性の身体は無数のセンサーを装備し、私たちの肉の身体と同様に《感覚する身体》であるだろう。そしてそのときこそ、18世紀フランスの代表的唯物論者であるラ・メトリの、『人間機械論』の主要テーゼが実証されるかもしれない。しかし、それにしても機械の身体をもつ知性は、どのような意識世界に覚醒するのであろうか。そこにも赤や青や外光があり、暖かさや冷たさや滑らかさがあり、ひとの声、風のそよぎ、小鳥の囀りが溢れているのであろうか。彼、あるいは彼女、あるいは《それ》は、「さて、今日はなにをしようか」と周囲を見回しつつ屈伸運動でもするのだろう。そして《それ》はいつか自問するに違いない。「この赤や青や風のそよぎは私の心象にすぎないのか」と。哲学するA.I.の誕生である。

注

(1) Thomas Hobbes, *Leviathan, or The Matter, Forme, & Power of a Common-Wealth Ecclesiastical and Civil,* 1651, Cambridge: University Press, 1904, Part 1, Chap. 1.（水田洋訳『リヴァイアサン』岩波文庫、全四冊、1954年、第一冊44ページ。）引用文は水田訳によるが、原典と照合して必要により訳語を変更した。以下、*Leviathan*と略記し、Part、Chapter、および水田訳第一冊のページ数、の順で示す。

(2) *Leviathan,* Part 1, Chap. 1, 44-45ページ。

(3) *Ibid.,* 43ページ。

(4) Cf. Baruch de Spinoza, *Ethica, ordine geometrico demonstrata,* 1677, Paris: Vrin, 1983, Pars II (De Natura et Origine Mentis), Propositio 14 – Propositio 29, Scholium.（畠中尚志訳『エチカ』岩波文庫、全二冊、1951年、上118-133ページ参照。）

(5) Cf. *Die philosophischen Schriften von Gottfried Wilhelm Leibniz,* herausgegeben von C.I.Gerhardt, 7 Bde., Berlin, 1875-90（以下、GPと略記）, Band VI, S.607-623, *Monadologie,* 1714.（河野與一訳『単子論』岩波文庫、1951年、210-288ページ参照。）

(6) *Leviathan,* Part 1, Chap. 1, 44ページ。

(7) *Oeuvres complètes de Malebranche,* direction: André Robinet, tomes XII - XIII (Paris: Vrin, 1991): *Entretiens sur la métaphysique et sur la religion,* 1688, éd. par A.Robinet（以下、*Entretiens*と略記）, I, §6.（『形而上学と宗教についての対話』第一対話、第6節。）

(8) Cf. *Entretiens,* VI, §5.（第六対話、第5節参照。）

(9) *Entretiens,* I, §10.（第一対話、第10節。）

(10) *Entretiens,* V, §6.（第五対話、第6節。）

(11) GP VII, S. 320.

(12) *Cf. Entretiens,* IV, §8, 10, 11.（第四対話、第8、10、11節参照。）

(13) Cf. *Entretiens,* XII, §7, 8, 9.（第十二対話、第7、8、9節参照。）

(14) Cf. GP IV, S. 458-459; *Monadologie,* §18.